
ジューンブライド

MUKKU

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ジューンブライド

【Nコード】

N3742L

【作者名】

MUKKU

【あらすじ】

新一と蘭の結婚式の1週間前に姿をくらました新一、3日で帰って来たが新一は結婚式当日あるサプライズを用意していたのであった。

前作『聖夜の攻防戦』の続きです。

第1章 親友からの相談（前書き）

新連載です。

ちなみに園子目線なのは今回だけだと思います。

第1章 親友からの相談

「え〜！？新一君3日も連絡ないの!？」

と今驚いた声をあげたのは、私、鈴木園子よ！

3ヶ月前に帝丹高校を卒業して2ヶ月前に帝丹大学に入学したピチピチの女子大生よ!!

「うん…」

今、悲しそうに俯きながら答えたのは私の一生の親友で私と同じ帝丹大学1年の毛利蘭。

ちなみに新一君っていうのは蘭の幼なじみであり婚約者で、高校生のころ高校生探偵として有名で今、日本トップ大学東都大学に入学して大学生探偵として大活躍していて顔もいいから女どもに大人気で、事件になると周りが見えなくなる推理バカの工藤新一のこと!

まあ小学生の時から蘭と親友である私にとっても腐れ縁なんだけど…。

「まったく…どうせあの推理バカのことだからどつかで事件解いてんだとおもっけど…和葉ちゃんと青子ちゃんは、服部君や黒羽君に何か聞いてない?」

と私は一緒に帝丹大学内のカフェテラスでお茶をしている高校生の時から仲良しで、今同じ帝丹大学1年の和葉ちゃんと青子ちゃんに聞いた。

「ううん…平次は何にも言っただけで…」

「青子も快斗から何も聞いてないよ…」

と和葉ちゃんと青子ちゃんは答えた。

先に答えた大阪弁の子が大阪から上京してきた遠山和葉ちゃん、その後には答えたのが顔が蘭にそっくりな中森青子ちゃんよ。

ちなみに服部君と黒羽君は新一君と同じ東都大学1年で、服部君の方は和葉ちゃんと同じく大阪から上京してきた和葉ちゃんの幼なじみで婚約者の大学生で高校生のころは『西の服部、東の工藤』と並

び称されて名探偵だったんだけど、今は服部君も東京に来て名探偵をやってるのよね…。

ちなみに服部君が東都大学に行くこと決めた時、和葉ちゃんと遠恋になると思ってたプロポーズしてOKをもらえたんだけど、和葉ちゃんも東京の帝丹大学に行くこと知ってたかなり脱力したらしいわ…。

黒羽君の方はIQ400という物凄い頭脳を持っている青子ちゃんの幼なじみであり婚約者で大学に入学してからマジシャンとしてデビューした今話題の新人マジシャンよ！

驚いたことに蘭と青子ちゃんがそっくりなら新一君と黒羽君もそっくりなのよね…髪型を一緒にしたら見分けられるのは蘭と青子ちゃんくらいね…。

青子ちゃんと黒羽君の婚約は前のバレンタインデーで初めてバレンタインの意味を知った黒羽君が青子ちゃんにチョコを貰ったとき嬉しさのあまりプロポーズしたんだって。

もちろん青子ちゃんはOKしたんだけど、高校3生になるまでバレンタインを知らないなんて信じられる？

私達4人が大学ではいつも一緒にいるのと同じく新一君達3人もよくつるんでるらしいわ。

話をカフェテラスでの会話にもどすわね。

「まったく…結婚式の1週間前に姿くりますなんて…蘭！そんないい加減な男、婚約解消しちゃいなさい！！」

あの推理バカが事件に集中しすぎて連絡がなくなるのはよくあることなんだけど、流石に頭に來た私は蘭に言っちゃった。すると和葉ちゃんも、

「せや！！蘭ちゃんはとっても素敵な子なんやからもっとええ男がおるかもしれへんで！！」

と同調してくれた。

まあ、私も和葉ちゃんも本気で言ってるわけじゃないんだけどね…。

すると蘭がちよっとムツとした表情になって、

「なら園子と和葉ちゃんは京極さんや服部君が全然連絡してくれなかつたら別れる？」

と聞いてきた。

まったく…蘭つたらず本気にするんだから…。

ちなみに京極さんというのは今、空手修行で海外に行ってる私のとつてもかつこいい彼氏の京極真さんよ！

最近会ってないな…。

ハッ！話が逸れてるいかんいかん…。

なんて私が考えていると和葉ちゃんが、

「それは無理やな…平次と別れるなんて想像できひん…ゴメンな蘭ちゃん…ひどいこと言っ…」

と切なそうな顔で言った。

私も、

「真さんと別れるなんて無理…」

と答えた。

本当にそんなこと考えられないわ…。

すると青子ちゃんも、

「青子も快斗に全然連絡もらなくても快斗と別れるなんて無理だよ…」

と同意していた。

すると蘭が、

「でしょ？私も同じ…私だって新一と別れるなんて考えられないわ…」

と言った。

まったく、私達は4人ともものすごい一途なんだから…。

まあ、それぞれの彼氏も同じくものすごい一途なだけだね…。

とにかく、新一君はどこに姿くらましてんだか…まったく…。

第2章 帰還（前書き）

まあ新一が帰ってくるんですけど帰還は大袈裟すぎたかもしれませ
ん。

第2章 帰還

「…にしても工藤君どないしたんやろうなー？」
と和葉が言うと、

「新一のことだから事件に集中して連絡するのわすれてるんだよ…」
と蘭は悲しそうな顔で言った。

「でも3日も音沙汰ないなんてコナン君だった頃以外ないんではしょ？」

と青子が聞くと蘭は暗い顔で頷いた。

その様子に園子が冗談で、

「まさか…浮気してる…とか？」

と言うとその後ろから、

「んなことするか…バー口！！」

という男の声がした。

4人が一斉に声の方向を見ると工藤新一が不機嫌な様子で立っていた。

「し、新一！！どうしてここにいるの？」

と蘭が驚いて聞くと、

「ああ…帰って来たらまっ先に蘭に会いたくなってな…無人島にいたせいで蘭に3日間も連絡できなかったから蘭が心配してんじやないかと思っただしよ！」

と答えた。

「だったら行く前に連絡してくれたらよかったじゃない！！本当に心配したんだからね！！」

と蘭が怒ると、

「しゃーねーだろ？急な依頼だったし…伊豆沖の孤島だとは聞いてたけど普段使われてない別荘が1つしかない所だとは思ってなかったんだよ…しかも長いこと整備もされてなかったらしく電話線切れてたし…連絡したくてもできなかつたんだよ！」

と新一は文句を言った。

2人の痴話喧嘩が始まりそうになったため和葉は慌て、

「な、なあ工藤君、よくアタシたちがここでお茶してるってわかったなあ……」

と聞いた。

「ああ…それなら蘭が持つてる発信機を頼りに来たんだよ」

と犯人追跡眼鏡をポケットから出して言った。

「発信機？」

と青子が聞くと、

「歩美ちゃんたちがよく新一の家に遊びに来るようになったら私も持ってた方が何かと便利だからって博士に探偵団バッジもらったの……」

と蘭はバッジを取り出しながら笑顔で言った。

3人が納得していると蘭はハツとしたように、

「新一！！学校は？」

と聞いた。

新一が面倒さそうな顔をして、

「うーん…帝丹大学からなら家に帰った方が早いし何かと疲れてるからサボる……」

と答えると、

「新一！！ただでさえ事件で抜け出してること多いんだからちゃんと大学行かなきゃダメじゃない！！こんな所で油売ってる暇があったら大学に行きなさい！！いくら入試をパーフェクトにできても単位採れなかった意味ないじゃない！！行かなかつら晩御飯作らないからね！！」

と蘭に説教されてしまい、急いで東都大学へ向かうことになった。

第3章 東都大学での会話

一方、東都大学では、

「あゝ事件も起きひんし…工藤も居らんし…暇や…」

「平次…事件は起きない方がいいだろ…」

「そらそうやけど…」

と平次と快斗が会話をしていた。

ちょうど今平次も快斗も講義がなく暇を持て余しているのだ。

「しかし、事件行つたつきり工藤の奴3日間も帰つてけえへんところをみるとよつぼどの難事件なんやろうな…俺も行きたかつたわ…工藤はなんで俺を置いて行つてもーたんやろ？」

と平次がため息をつくのを見て快斗は半ば呆れながらも、

「ただ単に新一の腕が落ちただけかもな…」

と言った。

すると、

「黒羽…テメエ…」

とドスのきいた快斗によく似た声がした。

声にドスがきいているが本気で怒ってるわけではないことがわかってる快斗は、

「あつ新一久しぶりじゃん！」

と軽い調子で言った。

その様子に新一はため息をつきながら、

「言つとくが腕が落ちたわけじゃねーからな…！」

と念を押した。

しばらく3人で話をしていると、

「あつ！工藤！！服部！！黒羽！！！」

という声がして3人が振り向くと大学に入学してから何かと3人からんでくる児玉という男が近づいてきた。

新一が、

「合コンなら行かねーからな…」

と言つと児玉は、

「なんでわかつたんだよ？」

と驚いた声を出した。

「お前が話しかけてくる理由はそれ以外ないやんか…おれもパスや…」

と平次が言つと児玉は快斗の方を見て口を開けようとしたがそれより早く快斗に、

「パス…」

と言われてしまった。

しかし児玉は、

「そこを頼むよ！！相手の大学の女の子達にリクエスト受けてるんだよ！！お前ら3人呼んで来てくれって！」

と頼んできたが3人共拒否した。

しかし児玉はあきらめず、

「頼むよ！！顔出すだけでいいから！！次の土曜日来てくれよ！！」
と頼むと、平次と快斗は面白そうな顔をして、

「なあ黒羽…次の土曜日って何月何日やった？」

「確か…6月12日だぜ…」

「そら余計行かれへんな…なあ工藤？」

「ああ新一が行ったら前代未聞だな…」

と急に新一に話をふつた。

「確かにその日は無理だし別の日でも行く気はねーよ…」
と新一が冷静に答えてるとわけのわかっていない児玉は、

「その日が何なんだよ？」

と聞くと平次が、

「工藤の結婚式や！！」

と答えた。

第4章 写真（前書き）

サブタイトルほぼ関係なしです。

第4章 写真

平次の予想外の答えにしばらく固まっていた児玉だったが、我を取り戻した後、

「え〜!!? 相手いるのかよ!？」

と聞いてきた。

児玉のあまりの大声に耳をふさいでいた新一だったが児玉のセリフにジト目で、

「相手のいない結婚式ってどんな状況だよ？」

と言った。

「そりゃそうだけど工藤に彼女がいるなんて聞いたことないし…」
とろたえていた。

快斗が、

「じゃあ新一の左手薬指にある物はなんだよ？」

と聞くと児玉は、

「そんなの虫除けだって大学のほとんどの奴が思ってるぜ…入学した時にはもうついてたし、お前ら女の気配ないし…」

と答えた。

「お前らってまさか俺や黒羽のも虫除けやて思われとんのか？」

と平次が自分の左手薬指についている指輪を児玉に見せながら言った。

「ああ… 3人が3人そろって入学した時から左手薬指に指輪してたから余計みんなそう思ってるぜ…」

と児玉が答えると3人は脱力してしまった。

3人が脱力しているのとは裏腹に新一の婚約者について興味を持った児玉が、

「なあ工藤!! お前の彼女どんな娘? いつ知り合っただ？」

と聞いてきた。

新一はため息をつきながら、

「物心つく前からの知り合い…どんな奴かは答える必要ねーだろ」とあしらおうとしたが、

「なんだよその態度知られちゃマズイことでもあんのかよ？」
としつこく聞いてきた。

別に知られて困ることはないのだが話す必要のないと考えている新一が無視していると快斗が、

「なんなら新一の奥さんの写真みるか？」

といつの間にかすっていた新一の携帯をいじりながら言った。

「いつの間に!？」

と携帯を取り返そうとしていた新一だったが平次に、

「まあええやんか!！」

と取り押さえられた。

この2人は蘭の写真を兎玉に見せて新一を冷やかそうという魂胆なのだ。

「えーと…蘭ちゃんの写真どれがいいかな？」

と快斗が選んでいると、新一が何かを思いついたようにニヤリとして、

「オイ、黒羽！服部！蘭の写真見せたら青子ちゃんと和葉ちゃんの水着姿の写真兎玉に見せるぞ!！」と言った。

「なんでお前が和葉の水着姿の写真持つてんのや!？」

と平次が不機嫌そうな顔で言うと、

「去年の夏にみんなで伊豆に行っただろ？その時にみんなで撮った集合写真さ…」

と答えた。

「けどそれには青子や和葉ちゃんの水着姿だけじゃなくて蘭ちゃんの水着姿だってあるだろ？そんな写真を独占欲の強い新一が他の男に見せるわけないよな？」

と快斗が反論すると新一はなぜか謎解きの時の不敵な笑みをみせて、
「甘いな…あの写真で蘭は元太の前に立ってるんだ…で、元太の影になつて蘭の水着はほとんど隠れてるってわけさ…てか独占欲が強

いのはお前らも一緒だろ……」
と答えた。

「……………」
今回は新一の作戦に完敗した快斗は大人しく新一に携帯を返した。

その後、新一が思い出したように、

「そうだ児玉……このことがマスコミとかに知られるて結婚式前にいる騒がしくなるのはゴメンだからこのことは誰にも言わないでくれよ!!」

と笑顔で言ったが決して目は笑って折らず鋭い眼光で睨まれた児玉は新一に本気で恐怖心を持ち、決して他言しなかった。

第5章 予定外のスケジュール（前書き）

今回から少し話の展開が早くなるかもしれません。

第5章 予定外のスケジュール

3日後、式場から結婚式のスケジュールが届き、それを見た新一は思わず、

「ニヤロ…」

と呟いてしまった。

「どうしたの？」

と蘭が聞くと新一はスケジュールの中盤に書いてある『黒羽快斗マジックショー』というのを指差して、

「黒羽のヤロウ…勝手に俺のふりしてこんなもんを予定にいれやがった…」

と苦々しげに言った。

「いいじゃない!!黒羽君は結婚式を盛り上げようとしてくれてるんだよ!!」

と言ったが新一は、

「イヤ…アイツはただ単に目立ちたいだけだ…」

と言って快斗に電話した。

『もしもし?新一、どうかした?』

と快斗が出ると新一は低い声で、

「テメエな…なんで俺達の結婚式に俺も蘭も予定にいれてないオメーのマジックショーがスケジュールに入ってるんだよ?」

と聞いた。

快斗は怒っている新一をよそに、

『感謝しろよ!!新一と蘭ちゃんの結婚式を盛り上げるために今話題の新人天才マジシャン黒羽快斗様が無料でマジックショーをやつてやるんだから!!』

と白々しく言ったが新一に、

「バーロ!!単に目立ちたいだけだろうが!!」

と言われると、

『あつ、バレた？』

と悪びれもせず答えた。

そうなるか新一も怒る気力を失い、

「オメーの好きにしる…」

と言つて携帯を切った。

携帯を切つた後新一がため息をついていると蘭に、

「ね…ねえ新一…」

と呼ばれて蘭の所に行くと、蘭がそのスケジュール表にもう一つ予定になかったものを見つけていた。

「今度はなんだよ…」

と蘭が指差している所を見るとそこには、『新郎新婦思い出の写真スライドショー』と書かれていた。

「新一これって…」

と蘭が言つと新一も、

「園子だな…まあ母さんも絡んでるだろうが…」
と言った。

今回の結婚式は園子が自らスポンサーを名乗り出て遠慮していた蘭と新一を押し切つて鈴木財閥がバックアップしてるのだ。

「『新郎新婦思い出の写真スライドショー』って企画…いかにも園子が考えそうなことだし…アイツなら勝手に予定に付け加えるなんて簡単にやってのけそうだし…しかも園子が持つてる俺達の写真じゃアイツは満足できないだろうから母さんから何枚か借りてるだろうな…母さんなら面白がつていくからでも写真を提供するだろうし…」
という新一の推理に蘭は苦笑いしていた。

この推理は完全に当たっているのだが、快斗のマジックショーの一件で怒る気力を失っていた新一は園子と有希子に何の文句も言わなかった。

第6章 結婚前夜

新一と蘭の結婚式の前夜いつものように新一の家と一緒に夕食を食べた後、新一が蘭の家まで送って行っている時、

「なんか…明日から蘭の夕飯食った後蘭を家まで送って行くつてもなくなるんだな…まっ、これからは2人で一緒に住むから当たり前だけだな…」

と新一が感慨深げに言つと蘭は少しうつむいて、

「うん…」

と答えた。

新一は蘭がいつもと様子が違うことに気づいて、

「どうした蘭？もしかしてマリッジブルーってやつか？」

と聞くと蘭は慌てて、

「そんなんじゃないの！！私、新一のことを好きになって良かったって思ってるし新一と結婚できるなんて凄く嬉しくて…幸せで…夢みたいだもん！！…この気持ちはずっと変わらないわ！！」
と答えた。

その答えに新一が優しく微笑んで、

「俺だつて同じだよ…蘭と結婚できるなんて俺にとつちや生まれてから今までで一番幸せなことだ…けどオマエ不安そうな顔してるぜ…オマエは昔から悩んでることを1人だけで抱え込んで他人に悟られまいとする…1人で抱え込まねーで俺に話してくれよ…」
と言つと、

「実はちよつとだけ怖いんだ…」

と蘭が答えた。

「怖いつて結婚がか？」

と新一が聞くと蘭は首を振って、

「新一と結婚することには何の不安もないよ…けど、私なんかが新一と釣り合うのかなつて思っちゃつて…新一は頭がいいし…名探偵

で有名なだし…」
と答えた。

新一は蘭のセリフに少々ずっこけたがすぐ立ち上がって、
「蘭：オマエが俺と釣り合わないんじゃないかなんて不安になる必要はねーよ…逆にオマエは俺にはもったいないくらのヤツなんだからよ！それに俺はオマエがいなきゃダメなんだよ！！だからそんなことで悩んでんじゃねーよバー口！！」
と言った。

「そんなことって何よ！？私は真剣に悩んでたんだからね！！」
と蘭が怒ったように言うと新一はニツとして、

「よし！！いつもの蘭に戻ったな！！オマエは明るく天真爛漫でいるのが一番似合ってるぜ！！」
と言うと蘭もクスツと笑って、

「そうだね…なんか安心した…ありがとね新一！！」
と言った。

ちようどその時毛利探偵事務所の前に着いたので、

「オウ！！じゃあまた明日な！！」

と新一は手を振って蘭が自宅へ入って行くのを見送り、その後空を見ながら、

(いよいよ明日か…)
と考えていた。

第7章 思い出(前書き)

初めて蘭目線で書きました。
あんまりうまくできてないかも…。

第7章 思い出

新一に送ってもらって家に帰った後、私はお父さんと少し話してその後私の部屋に戻ってアルバムを見ていた。

そのアルバムには新一と一緒に映ってる写真もたくさんあって、私っていつも新一と一緒にいるんだなと改めて感じた。

最初に新一と一緒に映ってる写真はまだ2人共生後1ヶ月にもならない赤ちゃんでこの時のことは覚えていないけどその写真の横にお母さんの字で、

『蘭、有希子と有希子の息子の新一君と初対面』
と書いてあった。

私の覚えている写真で一番古いのは幼稚園に入っただばかりの頃、リボンをつけて新一に抱きついてる写真だ。

たしか珍しくリボンをつけて幼稚園に行ったら新一に『かわいい』って言われてそれがすごく嬉しくて幼稚園から帰った後新一のお母さんに撮ってもらった写真だったわね…。

そういえばあの後新一にかわいいって言ってほしくてしばらくリボンつけて幼稚園行っただけ…と思いついてお母さんに見せると思わず笑みがこぼれた。

しばらくいろいろな写真を見ると私はふとあることに気づいた。カメラに向かってピースしてる写真や園子や他の友達と一緒に撮った写真など普通ならカメラ目線になっているはずの写真の中にたまに私だけ別の方向を向いている写真がある。

私は写真を撮られるのが嫌いではないから撮られるのが嫌でそっぽ向いてるわけじゃないよね…。

そんな風にそういう写真を見つけては不思議に思ったけど、1枚

の写真を見てその謎はあっさり解けた。

問題の写真は小学3年生の時の遠足に園子と一緒に撮った写真だ。その写真で園子はカメラに向かって満面の笑みでピースしているけど私はピースはしているけど後ろの方を見ていた。

そしてその目線の先には新一がいた！！

そういえば…この写真以外の変な方を向いていた写真はすべて写真に映ってはいないけど近くに新一がいた写真はばかり…。

まさか私…新一を見つめてたんじゃ…。

けどそう考えると納得できたし確かにこの時新一を見つめていたと思い出せる写真が多数だ…。

その謎が解けたとたん私は、

ハア…

と大きなため息をついてしまった。

まったく…私はこんな小さい頃から新一ばかり見てたのね…。

確かに私が新一への恋心に気づいたのは高校1年になった後だけど本当はもっと小さい頃から新一のことが好きだったのよね…。

まったく…こんなに小さい時から新一しか見えないほど新一のことが好きなのに…それにやっと気づいたのは高校に入学してからだなんて…。

「バカね私…ホント…大バカね…」

と私は思わず呟いていたけど、その言葉とは裏腹にとても嬉しかった。

第8章 親子

蘭を送った後、新一が家に戻ると家の明かりがついていた。

（あれ？…電気消し忘れたっけ？…それとも誰かが忍び込んだんじや…）

と考えていたが玄関の鍵をこじ開けた痕はなかった。

新一はそれを見て、

（やっぱり消し忘れが…）

と少し安心したが、

（蘭はそういうことにはけっこううるさいから消し忘れるなんてことはまず無いはずだ…）

と考え、腕時計型麻醉銃をいつでも撃てる状態した。

そして電気についている部屋に入ると、

「新ちゃん！！」

という声とともに新一は何者かに急に抱きしめられた。

「か…母さん…何でいるんだよ!？」

と新一が急に抱きしめてきた有希子に聞くと、

「何でって当たり前じゃない!!明日は新ちゃんも蘭ちゃんの結婚式なのよ!!息子の結婚式にこない親なんているわけ無いじゃない!!」

と答えた。

「けどよ…連絡くらいしろよな…」

と新一が反論すると、有希子の後ろから優作がコーヒ―を片手に現れて、

「まあまあ新一…有希子は新一が蘭君と一緒にいるはずだから邪魔しないようにと気を使っただよ…」

となだめてきた。

「だったら事前に連絡してくればよかったじゃねーかよ!!!そうすればそれにあわせて予定がたてられたのよ!!」

と新一が抗議すると有希子はあつけらかなとした顔で、

「だって事前に連絡しちゃうたら新ちゃんの驚く顔が見れないじゃない!!!」

と答えた。

(それが本音じゃねーか!!!)

と新一が心の中で突っ込んでいると優作が、

「しかし…新一、腕時計型麻醉銃が撃てる状態になっているということはかなり警戒していたらしいが玄関に置いてある我々の靴を見ればすぐに誰だか解ったはずだが…どうやら気付かなかったようだな…」

と言つて『まだまだ観察力が足りんな』とでもいうようにクスリと笑った。

そんな態度をとられてムツとしている新一だったが有希子はそんなことお構いなしに、

「さくで、新ちゃんの結婚前夜!!!今日は朝まで語り明かすわよ!!!」

と言い、優作も、

「そうするか」

と冗談っぽく言っていた。

まさか本当に朝まで語り明かすつもりは無いだろうと考えていた新一だったが有希子は本気だったらしくなかなか新一を解放しなかった。

しかし結婚式に寝不足な顔で出るわけにもいかない新一は半ば強引に自室へ戻った。

その時新一は、

(母さんも父さんもどこかぶっ飛んだところがあるけど…やっぱりなんだかねで俺のことを考えてくれてるんだよね…)
と改めて感じてた。

第9章 控え室(新二)(前書き)

いよいよ結婚式当日です。

第9章 控え室（新一）

結婚式当日、新一の控え室で、

「あら新ちゃん！白いタキシードも似合ってるじゃない！」

と有希子がタキシード姿の新一を見て嬉しそうに言いながら写真を撮りまくっていた。

新一がその様子に呆れた表情をしていると一通り写真を撮り終わったらしく、

「じゃあそろそろ蘭ちゃんのウェディングドレスを見て来ようつと

」

と鼻歌混じりに部屋を出て行った。

「母さん…いつにも増してもすごいテンションだな…」

と新一が呆れたように言うと、優作が笑いながら、

「新一と蘭君が結婚するのがよっぽど嬉しいんだな…」
と言った。

新一が、

（にしてもはしゃぎすぎだろ…）

と有希子が出て行った扉をジト目で見てしていると優作に、

「いよいよだな…」

といつもより真剣な表情で話しかけられた。

「ああ…」

と新一も真剣な表情で答えると、

「蘭君を幸せにするんだぞ…」

と優作に言われた。

新一はフツと笑って、

「当たり前ーだ…何があっても幸せにしてみせるぞ…」

と自信たっぷりな表情で言った。

新一と優作がしばらく話していると、控え室の扉がノックされ、
「よう工藤！！」

第10章 控え室(蘭) (前書き)

題名がジューンブライドなのに6月を過ぎてしまいました…。
けど絶対に完結させます!!

第10章 控え室(蘭)

一方蘭の方では、

「蘭…いよいよね…」

と英理が蘭に話しかけていた。

「うん」

と蘭が答えると小五郎が、

「幸せになれよ！」

と言った。

「お父さん…」

と蘭が目を見せると、

「蘭…式が始まる前から泣いてどうするのよ…」

と英理が苦笑した。

その時、

コンコン

とノックの音がして英理が出ると有希子がニコニコしながら立っていた。

「有希ちゃん！どうしたの？」

と英理が驚いて聞くと有希子は、

「だって…新ちゃんなんか素っ気なくて一緒にいてつまらないだもん！！それに蘭ちゃんのウェディングドレス姿早く見たかったし！！！」

と言った。

その後、蘭の姿を見て、

「キヤー！！蘭ちゃん可愛い！！蘭ちゃんスタイルいいからウェディングドレスもすごく似合うわね！！」

とすぐハイテンションで蘭を褒めまくって、さっきまで新一を撮っていたデジカメで蘭を撮りまくっていた。

また一通り写真を撮り終わった後、

「今度は英理ちゃんと小五郎君も一緒に撮りましょうよ!!」
と言って親子3人の写真を撮った。

するとまたノックする音がして、

「らん!! 着替え終わった?」

「蘭ちゃん!! おめでとな!!」

「おめでとう蘭ちゃん!!」

と園子と和葉と青子が入ってきた。

「園子!! 和葉ちゃん!! 青子ちゃん!!」

と嬉しそうに言って立ち上がった蘭を見た3人は、

「蘭…アンタ…すごく似合ってるじゃない!!」

「蘭ちゃんめっちゃ綺麗やん!!」

「天使みたい!!」

とそれぞれ感嘆の声をあげた。

「青子ちゃんの言うとおりウェディングドレスを着た蘭ちゃんって本当に天使みたい…シャロンが蘭ちゃんのことをエンジェルって呼んでたのがよくわかるわー!!」

と有希子が言うのと蘭の顔は真っ赤になっていた。

「ホント…新ちゃんにはもったいないくらい!!」

と有希子が言うと、

「確かに蘭はアヤツにはもったいないけどどういっわけか蘭もアヤツだけなのよね…」

と園子が言い、小五郎も、

「まっただ…」

と同調した。

すると和葉と青子が、

「けど蘭ちゃんの隣が世界で一番似合うのは工藤君やで!!」

「蘭ちゃんと新一君って一緒にいるとすごく幸せそうだしね!!」
と言った。

英理も、

「それに新一君なら蘭を任せても安心できるわね…」

と頷いた。

英理のセリフに小五郎も、

「何処の馬の骨だかわかんねーヤツに蘭を取られるよりはマシか…」
と意地を張っているような表情で言った。

すると廊下から、

「オ…オイ…オメーら押すなって!!」

「やいやい言うなやウツサイ奴ぢやなー!!」

「新一も男なら男らしく腹くくれよな!!」

「腹くくるって何にだよ!？」

と一見2人に聞こえるが3人の男の声でした。

そして扉が開いたかと思うと蘭の控え室に新一が快斗と平次に押されて入ってきた。

第11章 対面

蘭が新一の姿を見て、

「し…新一!？」

と驚いていると新一も蘭を見て、

「ら…蘭…」

と言って硬直した。

「…新一?どうしたの?」

と蘭が硬直している新一を見て不思議そうに尋ねると、有希子が、

「あら、新ちゃんったら蘭ちゃん ウェディングドレス姿に見とれて硬直しちゃった〜」

と嬉しそうに言つて、園子も、

「まったく…この男は…とても日本警察の救世主と呼ばれる名探偵には見えないわね…」

と呆れたように言つた。

「まあ蘭ちゃんに見とれて硬直するなんて新一らしいよな…」
と快斗もちゃかすように言つた。

3人のセリフで我に戻つた新一は慌てて、

「バ、バ…口!…!なんじゃねー!!」

と言つたが、

「真つ赤な顔で否定してもまったく意味ないで…」

と平次に言われてふてくされたような表情になつた。

一方蘭の方は、

「蘭ちゃん、工藤君にすつごい想われてて幸せ者やな〜」

と和葉に言われて真つ赤になりそれを見た青子に、

「蘭ちゃんったら真つ赤になって可愛いな」

と言われてさらに赤くなつた。

そんな蘭を微笑ましい様子で見ていた英理が、

「さてと…私たちはそろそろこの部屋を出るとしましょう…ほら行

くわよあなた！」
と言った。

小五郎が、

「まだここに居たっていいじゃねーか！」

と言つと英理はキツとした目で小五郎を睨み、

「私たち親がいるより仲の良い友達どうしでいる方が蘭もリラックスできるでしょ!!！」

と言つて小五郎を連行して部屋を出て行った。

有希子もその後が続いて、

「蘭ちゃん!!新ちゃん!!また後でね〜!!！」

と手を振りながら言つて部屋を出て行った。

その後、新一と蘭は残つた園子、平次、和葉、快斗、青子に冷やかされていたが、しばらくしてその冷やかしが治まつた後蘭は少し頬を赤らめながら、

「どう?新一?’

と自分のドレス姿を見せて言つた。

「ああ…すつげー綺麗だよ…」

と蘭と同じように顔を赤くして新一が答えた後、新一と蘭は周りが見えなくなつたのか特に何もしているわけでもないのにも、凄いらブラブオーラを発していて、それを見ていた園子たち5人もあまりのラブラブオーラに2人を冷やかす気にはなれなかつた。

第12章 博士と少年探偵団

しばらくして、ドアのノックの音がして、

「新一君、蘭君おじやまするぞい」

「あら、もうみんな揃ってるじゃない…」

「わ〜！！蘭お姉さん綺麗〜！！」

「蘭さん、新一さんご結婚おめでと〜ございます！！」

「腹減った〜！！早く結婚式始めてくれよ〜！！」

と阿笠博士、哀、歩美、光彦、元太が入って来た。

新一は元太のセリフにずっこけたが、

「よう！オメーら！！」

と声をかけ、蘭も、

「みんな来てくれたんだ！！」

と嬉しそうに言った。

博士と少年探偵団が来たためさっきまでの全開のラブラブオーラが治まって園子がホツとしたように、

「流石にあんなラブラブシーンをガキンチョたちには見せないか…」
と言って平次も、

「あんなラブラブな雰囲気が続いたら居ずるうてかなわんわ…」
と同調した。

園子と平次の話を聞いていた哀は、

「あら、でも私は見たかったわ…工藤君と蘭さんのラブラブシーン…
…からかうネタにはもってこいじゃない？」
と言った。

「あ…哀ちゃん！！」

「オメーな…」

と新一と蘭は赤くなって言った。

そんな2人を見た歩美、光彦、元太は、

「蘭お姉さんも新一お兄さんも顔真っ赤だよ！！」

「否定しないってことはラブラブでいたということは本当なんですね？」

「何赤くなってるんだよ？結婚するんだからラブラブするのは普通なんじゃねーのか？」

と言っつて新一と蘭はさらに赤くなった。

そんな新一、蘭、歩美、元太、光彦をよそに快斗は哀に、

「哀ちゃん…新一と蘭ちゃんのラブラブシーンを見たかったなんて言うが、あんなの目の毒だぜ！毒！！」
と耳打ちしていた。

快斗のセリフが聞こえた青子は、

「そうかな？青子は2人ともすごくラブラブで羨ましかったけどな〜」

と言っつて、それを聞いていた和葉に、

「せやったら青子ちゃんも黒羽君とあないな風にすればええやん！！」

と言われ、青子まで赤くなっていた。

しばらくしてみんな楽しげに話していると博士が急に泣きだした。

「おいおい博士…まだ式も始まっていないのに泣くなよ…」
と新一が言っつと、

「ワシは子供がいないし、君たちが小さい頃からずっと見てきたからワシにとっては君たち2人は子供同然じゃ…その2人が結婚すると思うと嬉しくて涙が止まらないのじゃ…」
と言っつた。

「博士…」

と蘭が感動していると、哀がため息をついて、

「気持ちわかるけど子供同然の工藤君と蘭さんの結婚式だから無礼講だとか言っつて披露宴でカロリーの高い物を食べちゃダメよ…」

とくぎを差した。

「あ…哀君…べ…別にそんなつもりじゃ…」

と博士が慌てて言うと周りは一斉に笑いが溢れた。

第13章 来客1

しばらく博士や子供たちと談笑した後、

「じゃあ、ワシらはこれで…」

と言って博士が子供たちを連れて控え室を出ようとして元太が控え室のドアを開けた途端、

ドン！！

とぶつかる音がして、

「わ〜！！」

と元太ともう1人の叫び声とともに2人で倒れた。

「イッテ〜…なんだよオメー…」

と元太が言っていると、その人物は、

「申し訳ありません！！…メガネ…メガネ…」

と元太に謝った後、転んだ時に落ちた眼鏡を探し始めた。

「え…瑛祐君じゃない！！」

と蘭が驚いて言っていると瑛祐は、

「蘭さんお久しぶりです！」

と眼鏡を探しながら言った。

その姿に、

「ホント…相変わらずの物凄いドジっ子ね…」

と園子が呆れ顔で言った。

眼鏡をかけ直した瑛祐は、

「蘭さん、新一さんご結婚おめでと〜ございます…新一さんの元の姿では初めましてですね…」

と快斗と青子の方に向かって言った。

「お…俺新一じゃないし、こいつも蘭ちゃんじゃないんだけど…」

と快斗が言っていると、

「えっ！？あつ！すみません！！」

とあたふたし始めたので青子が、

「蘭ちゃんと新一君はあつちだよ…」
と苦笑しながら教えた。

瑛祐は改めて新一と蘭の方を見て、
「お2人ともご結婚おめでとうございます…」
と言つと新一が、

「つてか…蘭はウエディングドレス着てんだから間違えるか普通…」
と呆れたように言った。

「ハイ…でも僕の運が悪いのは今に始まったことではありませんの
で…」

と瑛祐はため息をつきながら答えた。

「何かあつたの？」

瑛祐の様子が前と違ったことに気づいた蘭が心配そうに聞くと瑛祐
は、

「さつきここに来る途中、廊下で左目に大きな傷のある50代くら
いのヤクザみたいな人にぶつかってしまったんです…近くに目暮警
部さんたちがいたから何もされませんでした…もしいなかったと
思うと生きた心地がしなくて…」
と答えた。

瑛祐以外のメンバーにはその人物の心当たりがあり苦笑していると、
「どうしたんですか？皆さん…」

と瑛祐は不思議そうに聞いた。

新一と瑛祐の肩にポンと手を置いて、

「その人は、警視庁捜査1課の松本清長警視だ…つまり目暮警部の
上司…だからぶつかつたくらいじゃ何もされねーから安心しろ…」
と呆れ顔で言った。

「なんだ…そうだったんですか…」

と心からホツとしたような表情の瑛祐を見て、その部屋にいるみん
なは苦笑していた。

第14章 来客2

瑛祐も交えてしばらくみんな談笑していると、再びノックの音がして、

「オー！！工藤君と蘭君！！この度はおめでとう！！」

と言った目暮警部に続き、高木刑事、佐藤刑事、白鳥警部、千葉刑事、宮本由美婦警、松本警視が入って来た。

瑛祐は松本警視を見てギクリとして、

「あ、あの…先ほどは申し訳ありませんでした！！」
と謝ってそそくさと出て行った。

そんな瑛祐の様子を見ていた平次と快斗は、

「なんやあいつ…」

「よっぽど松本警視のことが怖いんじゃないの？」
と話していた。

一方、佐藤刑事は、

「おめでとう！！蘭ちゃん、工藤君…にしても蘭ちゃんすごく似合ってるわねー。ねえ高木君！！」

と高木刑事に話をふった。

「本当蘭さん似合ってるね！工藤君も幸せ者だ！！」

と高木刑事も佐藤刑事に同意すると由美婦警に、

「高木君も美和子に早くウエディングドレス着せてあげられるように頑張らないとねー！！」

と高木刑事をからかい始め、それを見ていた園子も、

「そうですね高木刑事！！佐藤刑事に早くウエディングドレス着せてあげないと誰かに取られちゃうかもしれないよ！！」

と由美と一緒に高木刑事をからかい始めた。

「え、ええ！？そ、そんなからかわないでくださいよ2人共！！」

とあたふたしている高木刑事を見て新一は蘭に、

「園子や由美さんみたいに人をからかうのが好きな奴が2人もいる

とスゲー厄介だな…」

とこっそり耳打ちして蘭は苦笑していた。

由美と園子が高木刑事をからかっているのと千葉刑事が、

「ウエディングドレスを着せたい人がいるのは高木だけじゃなくて白鳥さんもそうなんじゃないツスカ？」

と聞いた。

「な、なにを…？」

と白鳥警部が動揺していると新一が、

「そういえば白鳥警部、小林先生とはどこまでいったんですか？」

と白鳥警部に聞いた。

「ど、どうしてそれを君が知っているんだい？」

と白鳥警部が動揺しながら聞いた。

コナンとしては白鳥警部と小林先生の関係を知っている新一だったが新一としては知らなかったことを思い出した新一は一瞬「ヤベっ！！」という表情になったが、

「コ、コナン君に聞いたんですよ…アイツとは親戚ですから…」

と慌てて言った。

すると、

「コナン君と言えば今日この結婚式来てるんだろ？お姉さん同然の蘭さんとお兄さんとして慕ってた工藤君の結婚式なんだから」

と高木刑事がキョロキョロしながら言った。

蘭は慌てて、

「いえ、コナン君来てないんです…やっぱり外国にいると遠いですし…」

とごまかした。

それを聞いた佐藤刑事は、

「そう残念ね…久しぶりに会えると思ってたのに…」
と少し残念そうに言った。

すると、

「ゴホン…！」

と今まで黙っていた松本警視の咳払いがしてみんな一斉に静かになった。

そして松本警視は新一に向かって、

「結婚おめでとう…我々は君にいつもお世話になっているが、これからも期待しているぞ名探偵！」
と言った。

新一はその言葉に、

「ありがとうございます!!」
と頭を下げた。

第15章 式開始直前(前書き)

そろそろ本番です。

第15章 式開始直前

警察の面々が出て行った後、

「あつもうこんな時間やん!!」

と和葉が腕時計を見ながら言った。

「本当だ!! もうちよつと蘭ちゃん達とお話したかったけど、そろそろ会場に行つてないと!!」

と青子も慌てて言った。

「ほんならアタシら先会場行つてるな!」

「頑張つてね蘭ちゃん!! 新一君!!」

「2人のキスシーンはバッチリカメラに撮らせてもらうんだからしつかりやるのよ!!」

「工藤!! 緊張するんやないで!!」

「しつかりやれよ新一!!」

と和葉、青子、園子、平次、快斗の順に言つて5人は控え室を出て行った。

5人が出て行った後、

「いよいよだな」

と新一が蘭に話しかけると蘭は、

「うん」

と新一に微笑みながら言った。

すると控え室の扉がノックされ式場のスタッフが、

「そろそろお時間です」

と入つて来た。

新一と蘭は、

「はい」

と答え、控え室を出た。

控え室を出た途端緊張した表情になった蘭を見て新一はクスリと笑い、

「蘭！緊張するなって…なんかあっても俺がどうにかしてやっから安心しろよ…！」

と言った。

「じゃあ新一は緊張してないの？」

と蘭が聞くと新一は、

「かなりしてるな…けど蘭がいるし、これからは蘭とずっと一緒にいられるようになると思うと落ち着ける…」

と答えた。

「し…新一…」

と蘭が顔を赤くしてると新一は蘭の頬に優しくキスをした。

「な、な、な…」

と蘭が急のことで顔を真っ赤にしながらあたふたしてると、新一はイタズラっぽく笑って、

「緊張を和らげるおまじない…もう緊張してないだろ？」
と言った。

蘭は顔をさらに赤くしながら、

「バ…バカ…」

と言って非難の眼差しで新一を見たが、新一にキスされたことで安心して本当に緊張が抜けたので内心とても嬉しかったりする。

「さて、今ので俺の緊張も和らいだし…式の前だったからほっぺにキスにしといたけど、本番はまた後で誓いの時にな…！」

と言って、入場するために先に行った。

蘭もさすがに今のセリフにはたまらなく恥ずかしくなって、新一の後ろ姿に、

「バカ…!!…！」

と叫んだのであった。

第16章 入場

「それでは新郎の入場です」

というアナウンスで新一が入場した。

先ほど蘭にキスしたことで緊張がほぐれた新一だったがさすがに入場するときまた緊張し始めた。

しかし、新一はポーカーフェイスでいたためそれに気付いたのは新一の両親と哀、平次、快斗の5人だけであった。

「工藤の奴緊張してんな〜」

と平次が呟くと隣の席にいる和葉が、

「そっなん？堂々としてるように見えるけど…」
と聞いた。

すると快斗が、

「あいつらポーカーフェイス上手いから…でも、いつもより微妙に動きがぎこちない…緊張してる証拠だよ…」

と答えた。

青子は、

「青子はそんなこと気付かなかつたよ…」

と快斗と平次の観察力に感心していたが、

「あら、もつと緊張する出来事が起こつたら手足が一緒に動きだすで…」

「だったらやつてみるか？今蘭ちゃんの声で『新一！』って言うたら絶対そっなるぜ！」

「そらええな！黒羽やつてみ！」

と結婚式をぶち壊しかねないことをやり始めようとしたので和葉と青子は、

「このどアホー！」

「おとなしくしてよねバ快斗ー！」

とそれぞれの彼氏に拳骨をした。

新一は4人の会話は聞き取れなかったが拳骨されたシーンは見えていてそのおかげで緊張が和らいだのであった。

新一が入場した後、

「それでは新婦の入場です…皆様拍手でお迎えてください…」

とアナウンスがあり、小五郎にエスコートされて蘭が入場した。

バージンロードを歩くウエディングドレス姿の蘭を見て、

「わ〜…」

という女性陣の感嘆の声が漏れた。

歩美が目をキラキラさせながら、

「蘭お姉さんすごい綺麗〜！」

と言っている元太が、

「歩美、さつきも蘭姉ちゃんのウエディングドレスみたじゃんかよ

…」

と言うと哀に、

「バカね…女の子にとってウエディングドレスを着てバージンロードを歩くことは憧れ…その憧れのことを見ているんだからさつきよ綺麗に見えるのは当たり前よ…」

と言われてしまった。

さらに光彦も、

「それに蘭さん…さつきも幸せそうな顔をしていましたが今はもつと幸せそうです…だからさつき以上に綺麗に見えるのは当然です…」と元太に言った。

新一は蘭の姿にたくさんの方が見とれているのに一瞬不機嫌な顔になったが蘭の顔を見た瞬間もの凄い優しい表情になった。

その不機嫌な表情を見逃さなかった園子は、

（結婚式に花嫁に見とれる男共に敵意を持つってアヤツどんだけ独占欲が強いんだよ…）

と呆れた表情で見ている。

蘭が新一の隣に来た時、蘭のエスコートをしていた小五郎が緊張の表情から打って変わって真剣な表情になり新一に目で『蘭は任せませ…』と言うように視線を向けた。

新一もそれが通じ小五郎の目をみて頷いたのであった。

第17章 結婚式（前書き）

ついに結婚式！！なんです、本当の結婚式がこんな感じかどうか
あまり分からないので変な所があったら申し訳ありません…。

第17章 結婚式

2人が並んだ後、神父が新一に、

「工藤新一、汝は毛利蘭を病める時も健やかなる時も死が2人を分かつまで愛し続けることを誓いますか？」

と問いかけた。

新一はその問いに、

「誓います！！」

と確信を持った表情で力強く言い、次に神父が蘭に、

「毛利蘭、汝は工藤新一を病める時も健やかなる時も死が2人を分かつまで愛し続けることを誓いますか？」

と問いかけた。

蘭も新一同様確信を持った真つ直ぐな眼差しで、

「誓います！！」

とはつきり言った。

新一と蘭が永遠の愛を誓った後、2人は指輪の交換をした。

「それでは、誓いのキスを…」

と神父が言つと、園子、哀、平次、快斗、和葉、青子や新一と蘭の高校時代のクラスメート達は、『待つてました』と言わんばかりの表情になり園子を筆頭に十数人がカメラを構えた。

お互いにお互いしか見えなくなっている新一と蘭はカメラを向けられていることにすら気付かずしばらくお互いを見つめ合った後誓いの口づけをした。

キスの間、新一は流石にカメラのパシャパシャという音に気づき内心苦笑していたが蘭と一緒にになれるという幸福感ですぐにそれも忘れた。

長いキスが終わり2人の唇が離れた瞬間会場内は大喝采に包まれその気恥ずかしさから新一と蘭はお互いに顔を見合わせてはにかんだ。

その様子があまりにも幸せそうだったため参列者は全員毒気を抜かれた気分になった。

式が終わり、新一と蘭がライスシャワーで建物から出るとその瞬間、

バサバサバサ

と大量の鳩が紙吹雪と一緒に飛び交っていた。

その光景に圧倒されていた2人だったが、

「今の派手な演出……」

「黒羽だな……絶対……」

と2人で苦笑いしていた。

ブーケトスの時、和葉と青子がブーケを取ろうと張り切っている
と、

「和葉、お前は俺と婚約しとるんやしブーケ貰わんでもええやろ……」

「青子だつてもうブーケ取る必要ねーだろ？俺の婚約者なんだし……」

と平次と快斗が言った。

2人のセリフに和葉と青子はキツとした目で平次と快斗を睨み、

「けどアタシらはまだ未婚女性や！」

「それにブーケトスのブーケを貰うのは女の子の憧れなんだから変な水差すようなこと言わないでよ……！」

と怒って平次と快斗を置いて前へ出て行った。

一方園子は、

（あ〜ん……真さんがいればブーケ貰ったらその後プロポーズしてもらえるかもしれないのに……！！……でもいいわ！！絶対にブーケを取って真さんと結婚するんだから……！！）

と燃えていて、最前列で、

「らん！私はこちらよ！！」

と猛烈なアピールをしていた。

歩美も哀を引っ張って園子の近くに来ていて、蘭は園子や和葉、青子、歩美、哀がお互い近くにいろのを見ると、新一と顔を見合わせてその方向にブーケを投げた。

ブーケは綺麗な弧を描いて園子の手にとまった。

園子は一瞬呆然としていたがすぐ嬉しそうにはしゃいでいた。

ブーケをとれなかった女性陣は一瞬悔しそうな顔（哀を除いて）をしたが、園子に『よかったね』などと声をかけていた。

新一と蘭はそんな様子を見て幸せそうに微笑んだ。

第18章 2人だけの誓い

結婚式が終わり、披露宴まで少々時間があるから新一と蘭は園子に、「じゃあ披露宴までお2人で」と控え室で待機させられていた。

「無事結婚式が終わってよかったね!!」

と蘭が新一に笑顔で言っていると新一も、

「あ、ああ…」

と照れながら言った。

その後新一は少し赤くなり蘭が、

「どうしたの？」

と聞くと咳払いをしてから、

「蘭にもう1つ誓いの言葉を言いたくてよ…」

と言ってから一呼吸おいで、

「毛利蘭さん…俺、工藤新一は、死んでも…いや、永遠にあなたを愛し続けることを誓います!!」

と力強く言った。

蘭は少しの間頬を染めて呆然としていたが、クスクスと笑い始めた。

「…蘭？」

と新一が不思議そうに聞くと、

「だって新一も私と同じ事考えてんだって思うと可笑しくて…私も結婚式の時に『死が2人を分かつまで』ってというのが寂しかったんだ…私は死んでも新一の事愛し続けるのになって…」

と答えた。

そしてその後真剣な表情になって、

「工藤新一さん…私、毛利蘭も貴方を死んでも永遠に愛し続けることを誓います!!」

と力強く誓った。

新一はフツと微笑んで、

「俺達にとつてはさっきみんなの前でした誓いよりもこっちの誓いが優先だな……」

と言い、蘭も、

「2人だけの誓いだね……」

と微笑んだ。

すると新一がニヤッ笑って、

「んじゃ……誓いのキスを……」

と言った。

「えっ、ちよっ……」

と蘭が恥ずかしがりながらアタフタしていると新一は、

「いいじゃねーか、誰も見てねーし!」

と微笑みながら言った。

蘭が、

「うん……」

と頬を染めながら言うと、新一は蘭の唇に口づけをし、さっきの誓いのキスより長いキスをしていた。

そのキスは誰にも見られてなかったが、キスが終わった直後に、

「お2人さ〜ん!」

「そろそろ時間よ……」

と園子と哀が入って来て、キスが終わった直後で顔が赤い新一と蘭を見て2人に何があったか問い詰めていたため主役2人が披露宴会場になかなか来ずに披露宴の開始時刻が少し遅れてしまったのであった。

第19章 黒羽快斗マジックショー

披露宴会場に新一と蘭は大喝采の中入場した。

新一と蘭が入場すると2人の高校時代のクラスメートが一斉に押しかけて来て2人を冷やかし始めた。

「よお!! 工藤、毛利2人のキスシーンはばっちり撮らせてもらってたぜ!!」

「けど一番撮ってたのは園子よね、連写機能使って蘭と工藤君がキスしてる間ずっと撮ってた…」

「ニシシ…当たり前じゃない!! 蘭と新一君のキスシーンなんてからかう最高のネタだもの!!…写真1枚100円で売ってあげてもいいわよん」

と園子は既にプリントアウトしてある数枚の写真を取り出して言った。

「そ…園子!!」

と蘭が真っ赤になって言ったが、余計火に油を注ぐように勢いが増していた。

しばらくしてその騒ぎが終わった頃、黒羽快斗のマジックショーが始まった。

快斗はモノクルとマントは付けてないが他は怪盗キッドと同じ格好をしてステージに立っていた。

「ハハ…中森警部がいたらキッドじゃないかって疑われかねないな…」

と新一が蘭に耳打ちして、

「でも黒羽君同じ格好でもキッドと雰囲気が違うから大丈夫なんじゃない?」

と蘭が反論した時、

「レディース・アンド・ジェントルメン!!! 本日は我が友人工藤新一、蘭夫妻の結婚式のためのおきのマジックショーをとくご覧あれ…」

と雰囲気は快斗のままだがキッドの口調で言っ
て、
ポン

と何も無い空中からたくさん薔薇を出現させた。

その姿を見て、

「あんなキザなセリフでも中森警部疑われないと思うか？」
と新一が聞くと蘭も黙ってしまった。

しかし、中森警部は青子がアシスタントとして出てる快斗のマジックショーを何回か見に来ていてその時も今回と同じ格好で同じくキザなセリフだったのにもかかわらず快斗の事をキッドだとは微塵も疑っていなかった。

快斗のアシスタントとして青子が登場すると、新郎新婦である新一と蘭に顔がそっくりなマジシャンとそのアシスタントに快斗と青子の事を知らない人達はざわめきだした。

そのざわめきに平次と和葉は、

「そらそつや…俺らやって黒羽達に初めて会った時は驚いたんやから…」

「黒羽君と青子ちゃんが工藤君と蘭ちゃんにそっくりやから驚くのは当たり前やね…」

と納得していた。

快斗は次々と物凄い奇術を披露し人々を楽しませた。

平次と新一は最初はトリックを見破ろうと躍起になっていたが途中から諦めてマジックを楽しんだ。

「それでは最高にお2人の永遠の愛を祈って…ワン…ツー…」
と快斗がカウントし始め、

「スリー!!」

と言った瞬間、快斗のいた所から大量の鳩が飛び交い快斗の姿が消えていた。

飛び交った鳩のうちの1羽が蘭と新一の傍に止まった。

新一と蘭がその鳩を見てると、

「その鳩は以前、怪我をしている所をお2人に助けていただいた鳩です…」

といつの間にか2人の後ろにいた快斗が言った。

「あの時の!」

と新一がキッドがスコープオンに狙撃された時の事を思い出してる
と、

「彼女もお2人を祝福したいようですね…」

と快斗は言って、鳩を自分の手に止まらせて、ワン、ツー、スリー
とカウントすると、快斗の手に止まっていた鳩が、『HAPPY

WEDDING!!』と書かれたカードに変わった。

「これはお2人にプレゼントします…」

と言ってカードを蘭に渡した後、

「これでは本日のマジックショーはこれにて終了させていただきます
す…ではまたいずれ…」

と言って煙幕と共に快斗の姿は消えてマジックショーは終了したの
であった。

第20章 園子のスライドショー

快斗のマジックショーが終わって少しして、

「よっ新一！蘭ちゃん！どうだった俺のマジックショー？」

とマジシャンの衣装から着替えて戻ってきた快斗が青子を引き連れて新一と蘭に聞いた。

「すごくよかったよ！ありがとね黒羽君！！」

「流石黒羽だな…」

と蘭と新一が誉めると、

「また俺のマジックが見たかったらいつでも言ってくれよな！」

と快斗は嬉しそうに言った。

「青子ちゃんもアシスタントすごくよかったよ！！」

と蘭が言つと、

「ありがとう！！青子すごくドキドキしてたんだ…快斗みたいにポーカーフェイスなんかできないし…」

と照れたように言った。

すると辺りが暗くなって、

「ハイ皆さん！！お待ちかねの新郎新婦思い出の写真スライドシ

ョーです！！」

と聞き慣れた声でした。

すると、

「待ってました！！」

と言わんばかりの拍手を新一と蘭の高校時代のクラスメートや平次、快斗が始めた。

「なお、このスライドショーの司会進行及び写真の解説は私、鈴木園子でお送りいたします！！」

とマイクを持った園子が言つと、

「園子ったら…」

と蘭は赤くなり、

(悪乗りしすぎだろ…)

と新一は苦笑していた。

「まず最初の1枚は!!」

と園子が言っ出て来た写真は、1歳くらいの新一と蘭が向かい合っている写真であった。

「これは、2人が1歳の時の写真です!!こんな赤ちゃんの時からお互いに見つめ合っていてラブラブって感じですね〜!」

と園子は2人をからかうように言った。

新一と蘭は2人とも赤面しながら黙っていた。

次の写真は、蘭が昨日見ていた蘭がリボンをつけて新一に抱きついている幼稚園の頃の写真だった。

「こちらの写真は幼稚園に入ったばかりの頃、蘭がリボンをつけて幼稚園に行ったところ、新一君に『可愛い』と言ってもらって嬉しさのあまり抱きついている写真だそうです!ちなみに新一君のお母さんはこの頃にはすでに蘭が新一君のお嫁さんにすることを自分の中で決めていたらしいです…いや〜こんな小さい時から親公認の仲だったんですね〜!!」

次の写真は小学校1年生の頃の写真で2人ともボロボロで傷だらけだけれどしっかり手を繋いでいる写真だった。

「続いたの写真は小学1年生の遠足ではぐれて迷子になってしまった蘭を新一君が見つけたしてみんながいるところに連れ戻した写真です!!新一君はボロボロになってまで蘭を見つけたようです…」

「続いたの写真は…!!」

写真のスライドショーはどれもこれも2人がラブラブに見える写真ばかりでさらに園子の余計な解説のため新一と蘭はあまりに恥ずかしくなりこっそりと会場から抜け出した。

第21章 夕日の中で

披露宴会場を抜け出した新一と蘭は恥ずかしさで火照った顔を風に当たって冷ますために会場のあるホテルの庭に出た。

外に出た途端、

「わ〜！！綺麗な夕日！！」

と蘭は感嘆の声をあげていた。

ちょうど日が暮れるところでも綺麗な夕日であったのだ。

「園子が悪乗りしすぎていて恥ずかしくて思わず抜け出して来ちゃったけど抜け出して正解だったかもな…」

と新一が言つと、

「本当、園子ったら…」

と蘭も溜め息をついた。

「まあ今戻ってもさっき同様園子の冷やかし混じりのスライドショーが続くだろうししばらくこのまま2人で夕日見てようぜ！！」

と新一が言つと蘭は優しく微笑んで頷いた。

しばらく2人で夕日を見ていると蘭が不意に、

「夕日ってさ…私たち小さい頃の思い出けっこうあるよね…」
と言った。

「ああ、小学1年の時しばらく俺がお前のこと名字でよんでた頃夕日見てまた名前で呼ぶように戻ったしな…」

と新一が言つと、

「あと、かくれんぼで私が出られなくなっちゃった時に新一が助けてくれた時だね…」

と蘭は言つて、その後、

「夕日以外にも新一とお思い出つて小さい頃からいっぱいあって…」

新一と結婚するんだなって思うとなんかしみじみとしちゃうな…」
と呟いた。

「ああそうだな…それにこれからも2人でもっと思い出を作ってこ
うぜ…一緒に笑って、たまに喧嘩しても今まで通りすぐ仲直りして
…そういった1つ1つをこれからも大切な思い出にして…」

と蘭のセリフに新一が答えると蘭は、

「うん…」

と微笑んだ。

その後、どちらともなくお互いの顔が近づいて静かに吹く風の中、
お互いの唇がもう少しで重なるうとした時、

「まったく…いくら結婚したからってそういうことは誰も見てない
時にやってくれないかしら…」

と澄ました声がした。

新一と蘭は慌てて顔を離して声の方を見ると哀が呆れた表情で立
っていた。

「あ、哀ちゃん!!！」

「なんでオメーが!?!」

と蘭と新一が焦りながら聞くと哀は、

「2人がいないことに気付いたから探してたのよ…披露宴で主役の
2人が抜け出すなんてね…あなた達がキスしようとした時声をかけ
ようか迷ったけど、そろそろスライドショーが終わる時間だしスラ
イドショーが終わってあなた達がいらないことに園子さんが気付いた
ら彼女激怒するだろうと思って声をかけたのよ…本当は見たかった
けどね、あなた達のキスシーン」

哀のセリフに2人の顔は真っ赤になった。

「あら、顔が真っ赤よお2人さん?」

と哀がからかうように言うと新一と蘭はお互いに顔を見合わせて、
同時に、

「…夕日のせいだ(よ)!!！」

と大声で言った。

哀は、

「まあそういうことにしておくわ…そろそろ戻った方がいいわよ…」
と言って会場に戻って行った。

その後、新一と蘭も会場に戻り、2人が会場に戻った時、ちょうど最後の写真の説明を園子がしている時だったので皆スライドショーに夢中になっていたおかげで2人が抜け出していたことは優作と哀以外には気付かれていなかった。

第22章 小五郎への手紙

披露宴はその後も滞りなく進み、蘭が小五郎への手紙を読む直前、蘭が緊張した表情でいると、

「蘭お姉さん、大丈夫？」

と歩美が心配そうに聞いた。

「大丈夫！ちよつと緊張してるだけだから……」

と蘭が答えると、

「緊張した時は手に『人』って書いて飲み込めって母ちゃん言ってたぞ……！」

「あと、周りの人をカボチャだと思えともいいますね……！」

と元太と光彦がアドバイスをしていた。

「ありがとう……でも大丈夫だから……」

と蘭が少し無理してるような笑顔で言うと新一が、

「バー口……！オメーのその表情での『大丈夫』が1番大丈夫じゃねーんだよ！あんま無理すんじゃないぞ……！」

と心配そうに言った。

すると、

「新ちゃん……！そんなこと言う前に蘭ちゃんを安心させてあげなきゃダメじゃない……！」

「そうそう、蘭ちゃんの緊張を和らげるために抱きしめてあげるとか……」

「『俺がいるから大丈夫』やとか優しい言葉をかけてあげてもええんちゃう？」

「いっそのことキスしちゃうっていうのはどう？新一君……！」

と有希子、青子、和葉、園子の順で言った。

新一と蘭は4人のセリフに赤くなっていたが、新一は覚悟を決めたように蘭の方を向いた。

周りの皆が期待した様子で2人を見てみると、新一は蘭の頭にポ

んと手を置いて、

「バーロ！！緊張してんじゃねーよ！！蘭は蘭らしく……なっ！！」
と優しく言った。

新一の言葉で緊張のほぐれた蘭は優しい眼差しで、

「うん…」

と答え、マイクのある壇上に向かった。

その後新一は園子に、

「新一君！！私たちが言ってたことよりずいぶん生ぬるいじゃない！！もつと優しくしてあげないと！！」

と責められていた。

「バーロ！！人前でオメーらが言ってたようなことをしたら蘭の性格からしてもつと緊張しちまうじゃねーか！！」

と新一が答えると、哀が、

「なら、人前じゃなければ園子さん達が言ってたようなことするのね？」

と言い、結婚式が始まる直前に前科のある新一は真っ赤になって絶句した。

その様子で皆凶星だと分かり、新一は蘭の手紙の発表が始まるまですつと周りの冷やかしをうけていた。

蘭の手紙で小五郎が号泣していると英理が優しい眼差しで小五郎にハンカチを渡していた。

「いい感じじゃない！おじさまとおばさま！」

と園子が蘭の代わりに嬉しそうに言つと新一も、

「蘭も喜んでるだろうな…」

と壇上で手紙を読んでいる蘭を優しい表情で見ながら言った。

その蘭も手紙を読みながら嬉しそうな表情をしていた。

蘭が手紙の最後の方で、

「私が新一の所に嫁いだ後お父さんの事よろしくね…お母さん！」
と言うと、小五郎と英理の2人は真つ赤になって慌てていたが、この後結局蘭がいなくなつて小五郎が身を持ち崩すといけないからという建て前で英理が戻つて来て10年以上続いた長い別居は終わりを告げるのだが、今の小五郎と英理の2人は、嫁入りする娘の願いを冷たく断るわけにはいかないがまだ意地の張りあい収まらなくてアタフタしていたのであつた。

第23章 サプライズ（前書き）

やっと小説のあらすじに書いていたサプライズの謎が解けます。

第23章 サプライズ

披露宴も大詰めを迎えた頃、

「それでは続いては特別企画です」

と司会が言うと特別企画に心当たりの無い蘭が園子に、

「特別企画って？」

と聞いたが園子も、

「私に聞かれても……」

と困惑ぎみに言った。

「じゃあ新一は？」

と蘭が新一に聞くと新一は、

「さあな……」

と含みのある表情で言った。

「あー！その顔は知ってる顔ね！」

と蘭が新一に詰め寄ろうとした時、スクリーンに映像が映し出された。

その映像には江戸川コナンが映っていた。

『蘭姉ちゃん！新一兄ちゃん！結婚おめでとう！！遠い所にいるから結婚式行けなくてゴメンね……結婚式に行けない代わりにこのビデオレターを送るね！！本当は蘭姉ちゃんの花嫁姿見たかったんだけど……』

とコナンは言っていた。

「コ、コナン君……」

と蘭は驚いて新一の方を見ると新一は得意げな顔をしていた。

『蘭姉ちゃん、新一兄ちゃんならきつと蘭姉ちゃんを幸せにしてくれるよ！！だって新一兄ちゃん、蘭姉ちゃんのことしか見えてないんだもん！小さい頃からずっと蘭姉ちゃん笑顔が見たくて蘭姉ちゃんを喜ばせようとしてたんだってさ！！……それでも蘭姉ちゃんを幸せにできなかつたら僕が蘭姉ちゃんを取っちゃうかもしれないよ』

新一兄ちゃん！だから蘭姉ちゃんを絶対に幸せにしてあげてね新一兄ちゃん！！」

とスクリーンの中のコナンは言っていた。

コナンのセリフで蘭が赤くなりながらも涙を流していた。

『じゃあね蘭姉ちゃん、新一兄ちゃん、絶対に幸せになつてね！！』というコナンのセリフで映像が終わった。

「ちよつとどういう事新一？」

と蘭がコナンと新一が同一人物であることを知らない人には聞こえないように聞くと新一は、

「1週間くらい前に俺、3日間いなかっただろ？その時コナンになつてあの映像撮ってたんだ」

と答えた。

「けどあの映像撮るのに3日も必要ないんじゃないかあ…」

と園子が聞くと、

「コナンになる薬の効力が3日続いたんだよ！」

と新一は答えた。

「けど変声機使つて連絡してあげればよかったじゃない！！」

と園子が非難すると新一は、

「変声機ごしで蘭と話したくなかつたんだよ…なんか蘭を騙してるみたいで…」

と少し悲しげに答えた。

「けど、水くさいで工藤！俺にも内緒やなんて」

と平次が言うと新一は、

「今回は蘭にサプライズをするために他の人にも必要最低限の人にしか教えなかつたんだよ…」

と答えると和葉が、

「必要最低限って誰のことなん？」

と不思議そうに聞いた。

すると後ろから、

「私と博士よ…」

と哀が答えた。

すると快斗が、

「なる程、哀ちゃんにはコナンになる薬を貰う必要があるし博士にはその間居候させてもらう必要があるな、そんな体で一人暮らしはたいへんだから…」

と納得したように言うと、

「そういうことじゃよ」

と博士が言った。

すると青子が、

「新一君、蘭ちゃんに何も伝えなくて3日もいなくなって酷いって思ってたけど、蘭ちゃんのこと考えてたんだ〜!!」

と感心したように言った。

すると、

「けど自分で『新一兄ちゃんならきつと蘭姉ちゃんを幸せにしてくれるよ!!』なんて…」

と園子が呆れたように言うと新一は赤くなって、

「俺とコナンが別の人物だったらどう言うか考えてそのセリフを言っただよ…江戸川コナンとして蘭に『おめでと〜』って言いたかったしな…」

と答えた。

すると蘭が急に、

「新一!!」

と言って新一に抱きついた。

「ちよつ、ら、蘭!」

と新一が真っ赤になると、

「新一もコナン君もありがと〜!!すごく嬉しいよ!!」
と満開の笑顔で言った。

その時、コナンと新一が同一人物であることを知らない人達は新一達がコソコソ話を始めた事に不思議がり、蘭が急に新一に抱きついた事にさらに不思議がったのであった。

第24章 夫婦（前書き）

最後なのになんか短いです。

第24章 夫婦

披露宴が終わり、新一と蘭は新一の両親とともに自宅である工藤邸に戻っていた。

リビングで新一と優作はコーヒー、蘭と有希子は紅茶を飲みながらくつろいでいる時、

「ところで父さんと母さんはいつロスに戻るんだ？」

と新一が聞くと有希子は、

「まあ新ちゃんったら蘭ちゃんと2人きりで過ごしたくて早く私たちになくなれっていうのね？」

と大袈裟に演技じみた口調で言った。

「そういう訳じゃなくて、見送りしなきゃいけねーだろー！」

と新一が言うと優作が、

「まあ、こつちにも予定があるし明日には向こうに戻ると思うが見送りはいらさないよ」

とコーヒーを飲みながら言った。

「えっ！？どうしてですか？」

と蘭が驚いたように聞くと、

「私たちは今日空港近くのホテルに泊まるうと考えているからね…それに明日朝一の便で日本を経つから見送りとなると2人はたいへんだろ？」

と優作は笑顔で答えた。

「なんでわざわざホテルなんか泊まるんだよ？」

と新一が聞くと、

「やーねー新ちゃん！あなたが蘭ちゃんと水入らずで過ごせるようにしてあげるために決まってるじゃない！！今夜は結婚して初めての夜…甘い夜を過ごしてちょうだいね！！」

と有希子はイタズラっぽく言い、優作も、

「そういうことだ…」

と面白がっている口調で言っていて、2人のセリフに新一と蘭は真っ赤になっていた。

優作と有希子が出て行った後、

「ねえ、新一……」

と蘭は新一に声をかけた。

「なんだ？蘭？」

と新一が聞くと蘭は幸せそうに、

「これからずーっと新一と一緒にいられるんだね……」
と言った。

新一が優しい表情で、

「ああ、そうだな……」

と言つと蘭は、

「なんか嬉しい！」

と笑いながら言った。

すると新一が蘭に向かって、

「じゃあ改めて、これからもよろしくな蘭……！」

と言つと蘭も、

「こちらこそよろしくね、新一……！」

と輝くような笑顔で答えた。

）END（

第24章 夫婦（後書き）

ついに完結です!!

題名がジューンブライドで6月になる前に連載開始したのに連載終了が9月…かなりかかってしまいましたね…。

今度結婚後の新蘭を書いてみたいなと思うけどいつになるのかな…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3742/>

ジューンブライド

2010年11月7日09時53分発行